



公開学術講演会
 「國學院大學における博物館黎明期
 —戦後まもなくの考古学資料室と考古学会—」
 下津谷達男(元國學院大學栃木短期大学教授)

國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol.17 No.2
 発行人 笹生 衛 卓
 編集人 渡邊 卓
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0104
 FAX (03) 5466-9237

目次

- ◆ 公開学術講演会
 「國學院大學における博物館黎明期 戦後まもなくの考古学資料室と考古学会」下津谷達男(元國學院大學栃木短期大学教授)(深澤太郎) 1頁
- ◆ 第四十八回 日本文化を知る講座
 「渋谷と國學院大學—校地移転100年を迎えて—」(宮本富士) 2頁
- ◆ 日本文化研究所
 国際研究フォーラム「見られること/何が変わるか—ソリスと宗教文化
 To Be Seen Changes Through Interaction Between Tourism and Religious Culture」(星野靖) 4頁
- ◆ 令和五年度 第一回 研究開発推進センター 研究会
 「近世期における学知と諸社の活動—「由緒記」を通路として—」(新井大祐) 5頁
- ◆ 令和五年度 古典文化学 国際研究フォーラム(渡邊卓) 6頁
- ◆ 令和五年度 活動報告
 「國學院大學「古典文化学」の創出研究事業」(渡邊卓) 7頁
- ◆ 「延喜式」祭祀関連条文集成(木村大樹) 8頁
- ◆ Kokugakuin Japan Studies (KJS) (星野靖) 9頁
- ◆ 特別展
 「三嶋の神のモノガタリ—焼き出された伊豆の島々—」(吉永博彰) 10頁
- ◆ 國學院大學博物館
 令和五年度の特集展示(深澤太郎) 12頁
- ◆ 令和五年度
 國學院大學博物館活動報告(國學院大學博物館) 13頁
- ◆ 彙報
 國學院大學博物館活動報告(吉永博彰) 14頁
- ◆ 資料紹介
 鈴鹿家伝来装束(吉永博彰) 16頁

今年度は、國學院大學博物館の前身の一つである考古学標本室が創立された昭和三(一九二八)年から数えて九十五周年にあたる。そこで、この記念すべき節目に際して、本学文学部副手・助手・講師を経て、國學院大學栃木短期大学教授、野田市郷土博物館館長などを歴任した考古学・博物館学界の長老である下津谷達男先生をお迎えし、戦後間もなくの考古学資料室界隈の様子についてご講演を頂いた。

講演では、國學院大學予科に入学した昭和二十二(一九四七)年頃の話から始まり、恩師となる樋口清之先生と出会った切掛けについて披露。戦後の民主教育・地域文化振興が叫ばれる中、地元である千葉県野田市周辺の東葛地域における発掘調査に際して、樋口先生に協力を依頼したのが縁となり師弟の契りを結ぶこととなったという。また、考古学

資料室を拠点とした國學院大學考古学会の活動や、機関誌『上代文化』の刊行に当たって、大学当局の支援があったことにも触れた。このほか、昭和二十三(一九四八)年参加した静岡県登呂遺跡の発掘にまつわる思い出も言及。華々しい成果が語り継がれている調査の背景で、戦前の軍需工場整備で施された盛土を除去するため、トロツコヤもっこ担ぎで苦闘した実態も明らかだった。しかし、多くの大学が関わった調査を機として、本学を中心に東京学生考古学会が結成されるなど、資料室が研究の拠点ともなったと述懐。最後に、恩師樋口先生の知られざるエピソードを紹介して講演を閉じた。なお、講演の詳報については、『國學院大學 研究開発推進機構紀要』第一六号(令和六年三月)に掲載するので併せて参照されたい。

(文責: 深澤太郎)

第四十八回 日本文化を知る講座 「渋谷と國學院大學―校地移転100年を迎えて―」

開催の趣旨

本機構主催の第四十八回「日本文化を知る講座」は、令和五年七月十五日(土)、「渋谷と國學院大學―校地移転100年を迎えて―」と題して、本学常磐松ホールで開催された。

今回の講座は、本学が大正十二年(一九二二)に飯田町から渋谷へと校地を移転して以降、本年・令和五年(二〇二三)で百年の節目を迎えることにより企画したものである。

講座の内容は、渋谷移転後の國學院大學の歴史とともに、本学の立地する渋谷の歴史と文化とを顧みることに定め、本機構の校史研究、渋谷学の研究成果をもとに、時系列で通史的に振り返る構成とした。

なお、今回の講座は、S・S・A・P協定を締結した大学と連携して講座を開催する「渋谷ハチコウ大学」(事

務局・渋谷区生涯学習課)と協力して参加者を募集し、渋谷区の後援を得て実施された。以下、本講座の概要を紹介していくこととしたい。

○第一講

「『渋谷の岡に大学たてり』の100年」
渡邊卓(國學院大學研究開発推進機構
構准教授)

第一講は、渋谷に移転する以前の
本学の歴史にも言及した上で、渋谷
移転後の本学の歩みを顧みることを
テーマとして、本学と渋谷との関わり
を振り返る形の講演となった。

はじめに、渋谷移転に至るまでの
経緯として、明治十五年(一八八二)
の皇典講究所の創立、同二十三年の
皇典講究所を母体とする國學院の設
立、現在の「建学の精神」に繋がる
設立理念、飯田町校舎の状況、大正
九年の大学令大学昇格などの解説が
行われた。

そして、大正十二年の渋谷移転の
理由については、飯田町校舎が狹隘
で校地周囲も喧騒であり、研究教育
の場所としては不相应な環境となっ
たこと、大学令大学への昇格により
学生定員が増加し、施設充実が急務
となったことを指摘。そのような中
で、渋谷の水川裏御料地の払い下げ

を受けて、新校舎が建設された経緯
について説明がなされた。

また、大正十二年五月には渋谷の
新校舎が完成し、六月一日には授業
を開始したものの、三ヶ月後の九月
一日には関東大震災が発生したこ
と、その復旧工事が進められた後、
翌十三年に行われた久邇宮邦彦王奉
戴式と新校舎復旧竣工式挙行の際
に、校旗・校歌が制定された経緯に
も言及。その校歌の歌詞には「渋谷
の岡に大学たてり」との渋谷移転を
祝する言葉とともに、建学の精神が
うたいあげられたことを紹介した。

続いて、昭和五年に創建された神
殿をはじめ、本館・図書館・新館・
大講堂など、渋谷校舎の位置関係を
解説。また、國學院周辺には、青山
学院、実践女学校、東京農業大学、
東京女学院、温故女学院などの学校
があり、このことが『國大小唄』の
歌詞(「恋の実験常磐松温故青山女
学院」)等にも見えることに言及し
た。そして、渋谷移転後の本学にお
ける昭和三十年以降の施設・整備
の拡充、平成十四年からの渋谷キャ
ンパスの再開発などを解説。さら
に、学生たちの行動は渋谷の街と深
い関わりがあること、渋谷の文教地
区の形成には、「渋谷の岡」の歴史
が関わることなどが指摘された。

○第二講

「関東大震災と渋谷」

吉田律人(横浜都市発展記念館主任
調査研究員)

第二講では、大正十二年九月一

日、國學院大學の渋谷移転直後に発
生した関東大震災において、渋谷の
被災状況はどうであったかをテーマ
として講演が行われた。

はじめに、前提として、地震規模
はマグニチュード七・九であり、震
源域は神奈川県西部であること、東
京よりも神奈川県が圧倒的に
大きかったことを紹介。近代以降の
日本の地震では、約十五万人とい
う圧倒的な死者数であり、九割以上
は火災による焼死者であったことを
解説した。

また、これまでの歴史学の研究で
は、「①人災・加害問題の事態解明」
「②後藤新平を中心とした帝都復興
計画」が研究されてきたこと、災害
史、自治体史の記述では災害の全体
像を提示してきたが、それでは確認
しきれない実態については、個人の
記録から確認する方法が有益である
ことを提示。本講演では、渋谷在住
者の記録である①藤田佳世『渋谷道
玄坂』(昭和三十六年)、②大岡昇平
『少年―ある自伝の試み』(昭和五十
年)の記述をもとに、渋谷における
被災状況の検討がなされた。

具体的には、関東大震災当日の渋
谷の状況について、渋谷の台地部分
は被害が少なく、火災もなかった
が、瓦礫による道路の封鎖、強い余
震、社会基盤(鉄道・電気・ガス・
水道等)の機能不全等が起ったこと
を紹介。これらの状況について、渋
谷在住者の記録から該当箇所を抽出
し、説明がなされた。また、「朝鮮
人暴動」情報が発生し、流言が伝播、



被災した軍隊・警察も混乱したと、九月三日以降は流言が順次沈静化した状況を時系列で詳細に説明した。

最後に、講演の総括として、東京市や横浜市と比べ、渋谷の被害が軽微であったこと、大山街道を使った避難民の移動があり、流言の伝播と混乱の拡大があったこと、避難所の開設、救護活動の拠点となり、避難民が定着したこと、関東大震災が東京市西郊部発展の起爆剤となったことを指摘し、第三講へと繋げた。

○第三講 「渋谷区の誕生」

手塚雄太(國學院大學文学部准教授)

第三講では、昭和七年十月一日、渋谷町・千駄ヶ谷町・代々幡町が合併・再編され、渋谷区が誕生する過程をテーマとして講演が行われた。

はじめに、渋谷区誕生の経緯を理解する前提として、明治四年の東京府設置、同十二年の東京十五区設置、同二十二年の東京市設置(十五区の範囲)について言及した上で、昭和七年には隣接八十二町村が東京市に合併したこと(大東京)を説明。この八十二町村が二十区に再編されることで東京三十五区が成立し、東京市の「市域拡張」がなされ、その際に渋谷区が誕生したことを解説した。

次に、「市域拡張」の背景として、東京市(東京十五区)の人口飽和と、隣接八十二町村への人口流入、市域を超えて市街地が拡大したことがあ

り、その理由については、鉄道網の発展・宅地開発・関東大震災などがあったことが指摘された。

また、人口増加に対応する各町村では、インフラ整備が必要となったが、財政規模が小さく、単独では困難であったことから、隣接町村を東京市に合併させ、一体的な都市経営を行おうという議論が昭和六年に起こったことを指摘。この合併・再編の際に不可避となったのが、新区の名称、区役所設置箇所、区の領域等を巡る対立であったと述べた。

続いて、合併前の渋谷町・千駄ヶ谷町・代々幡町について、人口と財政から比較。渋谷町が二町に比べ、圧倒的に規模が大きかったことを指摘した。さらに、渋谷町が「都市的施設の整備、町経済の膨大なる点」等から、「依然として全国第一の町たる貫禄」を有すると評されたことを紹介。その背景には、「住みよき渋谷の建設」を目指して、町を動かす、インフラ整備を進めた渋谷町交友会の存在等があったと指摘した。

そして、昭和七年四月には渋谷区編成の原案が作成され、五月一日には国に申請、各町村に照会した経緯を紹介。その後、新市域は「代々木」の名が新区名に相応しいとの意見、「代々木区」「神宮区」への変更か、「代々木区」で独立させてほしいとの意見等があり、千駄ヶ谷・代々幡両町には渋谷の名で東京市へ編入されることへの拒否感があったことが指摘された。こうした意見対立もあ

知事により「規定方針」で進むことが定められ、原案通り「渋谷区」で決定し、昭和七年十月一日、渋谷区が誕生した経緯が説明された。

最後に、震災により「住みよい渋谷」は破壊されたものの、震災復興を経て復活した経緯、一九六〇年代以降、副都心・業務地としての渋谷が形成され、「若者の街」渋谷へと変貌したことに言及し、第四講へと繋げた。

○第四講

「渋谷をそだてる若者文化」

高久舞(帝京大学文学部講師)

第四講では、一九六〇年代以降、現在に至る渋谷の若者文化をテーマとして、都市・渋谷の民俗文化を民俗学としてどのように把握していくかという観点から講演が行われた。

はじめに、民俗学上の「都市」は地理的概念ではなく、文化概念「都市的生活様式」を意味するものであり、地域民俗学、生活空間としての「渋谷」と、概念的・抽象的な文化的存在である「渋谷」の二種類があることに言及。さらに、渋谷を支えるアクターとして、住民・行政・企業・外来者・情報があり、それぞれ関係を持ったり、離れたりしながら文化を形成すると述べた。

そして、一九六〇年代以降の「若者の街」渋谷の形成について、若者文化の観点から説明を行った。まず、一九六〇年代の「若者の街」は新宿であり、当時の渋谷は、渋谷周辺に通う大学生等が集まる場所であ

あったことを紹介。そして、一九七〇年代〜一九八〇年代の渋谷は、西武と東急(企業)による消費文化の発信とともに、渋谷周辺の大学生以外の若者(外来者)が訪れる「若者の街・渋谷」となったこと、一九九〇年代以降は渋谷を訪れる若者の低年齢化が進んだことを指摘した。

また、一九六〇年代〜一九八〇年代の渋谷を訪れる若者は「消費者としての若者」であったが、一九九〇年代以降の若者は「消費しない若者」になったと分析。続いて、二〇〇〇年に開業した渋谷マークシティのキャッチコピー「シブヤがオトナになる日」等も紹介しながら、消費者拡大のために「オトナの街」へと渋谷の開発が進んだことを指摘した。

一方、一九九〇年以降はファッションだけでなく社会的な部分でも渋谷が目された時代であり、一九九〇年代の渋谷を訪れた「消費しない若者」が、現在に続く渋谷の文化の基盤を形成したと分析。さらに、渋谷のスクランブル交差点が東京のシンボリック的存在となったことにも言及し、消費者ではない若者がハロウィン等の特別な時にスクランブル交差点へと集まってくる事実から、企業の思惑を超えた渋谷の若者文化が形成されていると指摘した。最後に、消費しない若者が「集う渋谷」を創り出しているとの見解を述べて、講演を締め括った。

日本文化研究所
 国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか—
 To Be Seen: Changes Through Interaction Between Tourism and Religious Culture」

日本文化研究所は、二〇二三年十二月十七日に国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化 To Be Seen: Changes Through Interaction Between Tourism and Religious Culture」を開催した。以下概要を記す。

日時：二〇二三年十二月十七日(日)

十三時半～十七時半

場所：國學院大學渋谷キャンパス

一一〇周年記念二号館 一階

二一〇一教室

発表者・題目：

・石本東生(國學院大學観光まちづくり学部教授)「『ギリシャ』…神話とキリスト教の舞台そして観光—文化遺産を活かす共存—」



國學院大學

・沈昭良 (SHEN Chao-Liang) (写真家、華梵大學攝影與VR設計學系教授)「写真と社会風景—『STAGE』『Singers & Stages』『台湾綜芸団』を例に—」

・加藤久子(大和大学社会学部教授)

「共生の物語をつむぎなおす—ポーランドに出現した2・5次元のユダヤ人街—」

・ケイレブ・カーター (Caleb CARTER) (九州大学大学院人文科学研究院准教授)「自分を取り戻す/山里を取り戻す—修験道とツーリズムの交錯—」

コメントーター：
 ・山中弘(筑波大学名誉教授、日本文化研究所客員教授)

司会：
 ・平藤喜久子(國學院大學教授、日本文化研究所所長)

使用言語：日本語
 参加費：無料
 主催：國學院大學研究開発推進機構

参加者：約七〇名
 日本文化研究所

開催趣旨：
 宗教とツーリズムは、グローバル化とあいまって、より一層相互に密接に関わ



総合討議の様子

るようになり、宗教文化を資源としてツーリズムを振興しようとする試みは、もはや珍しいものではない。それでは、宗教とツーリズムの交錯によって、どのような変化が生じているのだろうか。

宗教は、それが行われる場において、物体としてのモノや、実践としてのコトを伴うため、そもそも「見られる」ものであることとなるが、誰もがスマートフォンを用いて日常的に写真や動画を撮り、かつ即座に発信することが可能になったという現代的な状況において、そのように「見られる」宗教は、どのように変容するのか。あるいは何を見せているのか。他方、それを「見る」人々の側も、見ることを通して何らか変化しているだろうか。

これは、現代社会における宗教の問題であり、必ずしも日本の宗教文化に限定された話ではない。本フォーラムでは、様々な現場で調査・研究を行っている研究者に、宗教とツーリズムの多様な交錯のあり方について報告してもらい、議論を深めたい。

日本文化研究所では、二〇二〇年から、視覚文化を鍵として宗教文化に考察を加える国際研究フォーラムを連続して開催してきており、「見えざるものたちと日本人」「日本の宗教文化を撮る」「ミュージアムでみせる宗教文化」、「見られる」ことに焦点を合わせた本フォーラムも、その流れに位置付けられる。

まず発表者四名より、各々がフィールドとしてきたギリシャ・台湾・ポーランド・日本の戸隠山といった幅広い事例についての報告がなされた。その後、山中氏は、「ツーリズムと宗教文化」というテーマの意義と射程を再確認したうえで、それぞれの発表者にコメントし、それに対するリプライを経て、総合討議が行われた。総合討議では、例えばフロアから「誰に」見られるのか、といった問いかけがなされ、活発な意見交換がなされた。

参加者について、学生が三分の一程度を占めており、その問題関心に強く結びついたテーマであったといえる。また、アンケートの結果も好評で、参加者に新たな視点を提起する充実した機会となった。

(文責・星野靖二)

令和五年度 第一回研究開発推進センター研究会 「近世期における学知と諸社の活動―由緒記」を通路として―

研究開発推進センターでは、令和四(二〇二二)年度より研究事業「神道・日本文化の先端的研究」を推進している。

本事業はこれまで本機構が実施してきた神道・日本文化の研究をさらに発展させ、「新たな国学的研究による拠点機能の拡充」を目指すもので、そのため、いくつかの柱を定めて事業を推進しており、その中の一つに「神道・日本文化にかかる近年の研究の概括と課題抽出」がある。すなわち、「先端的研究」推進のため、その名の通り神道・日本文化を取り巻く最新・最先端の研究動向について調査・把握し、そこで得られた成果によって更なる事業の展開へと繋げていくことを企図するものであるが、目下、それらのうちの一つの動向・課題として、とくに近年、日本文学などの分野において着実な成果が上げられつつある、「近世期における社寺の由緒形成の実態」に着目することとした。

そして、その課題についての先端的な成果・知見を機構内で共有するため、当該問題に対して精力的な研究を進めている外部の研究者を招き、研究会を開催することとした。

※本研究会は原則として機構内限

定開催とし、機構内の専任・兼任教員、客員教授、研究員(研究補助員・共同研究員含む)を対象として行った。

※本研究会は、令和五年度 國學院大學特別推進研究助成事業「近世神社由緒論の新視点―京都稲荷社を中心に―」(研究代表表・松本久史教授)との共同開催とした。

【開催趣旨】

神社及び寺院、すなわち「社寺」の由緒来歴について記された「社寺縁起」については、神仏習合(本地垂迹)が盛んとなってくる中世期に多く作成されたことは広く知られるところである。とくに中世の縁起は、御伽草子(本地物)としても広く流布していくこととなった。こうした縁起について、これまで、神道学のみならず、歴史学、あるいは文学・文学や民俗学からの研究の成果が数多く提示されているが、それらの多くが古代・中世の「縁起」を対象としたものであり、近世期の「由緒記」については、未だ検討が十分になされているとはいえない状況にある。

近世神道を解明する重要な核の一

つは「神社」であるが、現状では必ずしも個別神社の史料に即した実像は明らかにされたとはいえない。

思想的には国学に基づく復古神道の台頭、制度的には祭儀の復興に伴う神道の仏教からの自立があるように、全体として近世は神道の「復興・復古」の傾向が見られるが、その要因を、専門領域を超えて複合的に考えていく必要性がある。すなわち、社会実態としての「神社」と、言説・思想としての「神道」の関係性の究明が、近世神道の実像の解明に必要な不可欠なのである。

そこで本研究会では、「由緒記」形成のプロセスに焦点を当て、近世の学知と諸社の活動実態との関係を明らかにすることにより、近世神道の特質の抽出に努め、その変容と持続の様態の具体像を検討する。

【日時】

令和六年一月二十日(土)
十四時〜十六時三十分

【開催形態】

オンライン開催(Zoom)

【報告者】

松本久史氏(研究開発推進センター長・教授、神道文化学部教授)
向村九音氏(公益財団法人元興寺文化財研究所文化財調査修復研究グループ研究員)

【司会】

新井大祐(研究開発推進センター准教授)

【当日の概要】

まず松本氏より「近世神社由緒記とその学知―京都稲荷社を中心に―」とのテーマのもと、これまでの近世神道・神社研究の潮流や、近年の研究動向などを整理しつつ、そこから近世期の「由緒記」の形成過程が「思想」と「実践」の結節点として着目すべきものであることなど、研究史に基づきつつ本研究会の意義や開催に至る背景の説明がなされた。さらに事例の一つとして近世期の京都稲荷社(伏見稲荷社)の由緒を取り上げ、その成立には、古典に基づきつつも意図的に改変されている部分が散見することなどを挙げ、神社由緒記の博搜と整理・分析が、近世期の「神道の復古」の実態の解明に繋がるとの見解が示された。

次いで向村氏から「神社の「由緒記」と神職の「家の由緒」―石上神宮若宮祭祀への検討を通して―」との報告がなされた。近世期の大和・石上社の由緒記の「創出」という動きに焦点を当て、由緒記は神社の縁起であるとともに、社家の「家の由緒」すなわち祭祀者としての地位を保証するものとして機能していたことや、それに伴って由緒記が可変的・相対的なものであったと考えられることなどが報告された。

(文責・新井大祐)

令和五年度 古典文化学 国際研究フォーラム

令和五年十二月一日（金）、國學院大學研究開発推進センター「國學院大學古典文化学」の創出研究事業の主催で、国際研究フォーラムを渋谷キャンパス（総合学修館（六号館）六B一三教室）で開催した。

本フォーラムでは平成三十年十一月六日に学術交流に関する協定書を締結した研究開発推進機構と中国・南開大学外国語学院との協定に基づき、東アジア的視点から日中の文化・学問交流を中心とした報告が行われた。本学から笹生衛（研究開発推進機構長・神道文化学部教授）、西岡和彦（神道文化学部教授）、南開大学から王凱（外国語学院副院長）の三名による報告があった。

笹生教授は「東アジアの交流・交易と日本の神観の変遷―認知宗教学の視点で考えた宗像三女神の神観を中心に―」という題で、近年の認知宗教学が提示する人間の脳の認知パターンから古代の宗像・沖ノ島祭祀における神観を再検討し、十世紀以降の環境変化と交易との関連から古代の宗像の祭祀・神観の変化についての考察を報告した。

人間の脳の認知機能を踏まえた上で、祭祀のメカニズムは人格化して直観される、特定の現象の行為者と



〈笹生衛・教授〉

人間との交換とし、自然災害が多い日本列島では独特な神への信仰と祭祀が成立したと指摘。宗像三女神の神観の基本は、沖ノ島が玄界灘の海上交通における要所として機能したことによるが、十世紀以降は地形の変化や自然災害の激甚化に伴い、仏教経典で意味づけされた国土守護の神へと転換したと述べた。また古代と異なる海路で行われた日宋貿易との関係もあり、新たな信仰と祭祀の場を形成、中世的な物流・交易と仏教と深く結びついた中世的な神観の成立とが密接に結びついていたのではないかとの見解を示した。



〈西岡和彦・教授〉

西岡教授は「神儒兼学と和魂漢才」という題で、江戸時代の儒学者である山崎闇斎を中心に神儒兼学、闇斎の弟子である谷秦山が説いたとされる和魂漢才について報告した。仏教などのように、外来の文化・宗教を受容する際、そのまま受け入れようとすると齟齬が生じ、問題へと発展するため、日本の文化・宗教との擦り合わせが不可欠になるとの考えを示した上で、闇斎の学問は当にそれにあたりと指摘。神道と儒教、特に朱子学とともに学び相互補完し合う「神儒兼学」であり、それをもって、日本人としての立派な人格を育んだ「和魂漢才」の人になることが目的であったと述べた。そして、闇斎の学問が目指すところは、朱子学と同じ聖人であり、それを日本では天照大神として説明したという見解を示した。

王副院長は「科研からみる中国の



〈王凱・副院長〉

日本研究」という題で、近年の中国における文学・歴史学・哲学分野での科学研究費プロジェクトから日本研究の傾向について報告した。中国の科学研究費プロジェクトには、国家・省部・大学という三段階のレベルがあり、また青年・計画・重点・重大などの異なる性質のプロジェクトがあることを説明。その中の国家レベルの科学研究費プロジェクトにおいて、日本に関する研究は、近年では中国・韓国なども含めた東アジアを範囲とした研究の一つとして行われる傾向にあると指摘した。

当日の会場には、学内外を問わず、学生・研究者ら六十名以上が参加し、盛況の内に幕を閉じた。

（文責・渡邊 卓）

令和五年度 活動報告 「國學院大學「古典文化学」の創出研究事業」

一、事業概要・目的

本事業は、國學院大學が平成二十八年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」(タイプB..世界展開型)として選定された「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―研究事業を継承するもので、令和三年度研究事業「神道と日本文化の創造的『古典学』―令和の新しい国学研究―基盤整備事業」の後継事業にあたる。

- 本事業では、「国学」に由来する本学の「古典」研究をより一層、発展させることを目的とし、中期五カ年計画に基づき五年間にわたり以下の事業を推進していくものである。
 - ① 国際シンポジウム・ワークショップ等の開催
 - ② 『古事記』・『万葉集』の文献学的研究
 - ③ 「国学」的「古典」研究の再検討
 - ④ 研究成果の教育還元
 - ⑤ 「古典学総合データベース」の構築
 - ⑥ 研究成果の社会発信
- 本年度実施した、それぞれの事業内容の詳細は、次の通りである。

二、事業報告

○国際研究フォーラム

本フォーラムは平成三十年十一月六日に学術交流に関する協定書を締結した研究開発推進機構と中国・南開大学外国語学院との協定に基づき開催された。東アジアの視点から日中の文化・学問交流を中心とした報告が行われた。題目は次の通り。

- ・「東アジアの交流・交易と日本の神観の変遷―認知宗教学の視点で考えた宗像三女神の神観を中心に―」(笹生衛)
- ・「神儒兼学と和魂漢才」(西岡和彦)
- ・「科研からみる中国の日本研究」(王凱)

○定例研究会の開催

本年度はZoom(オンライン)にて三回開催した(第一回、第二回は一八時―一九時三〇分。第三回は一八時三〇分―一九時三〇分)。各回の日時・発表内容は次の通り。

- ・第一回(令和五年五月三十一日)「古事記注釈」検討・古事記注釈(三九)「葦原中国平定(四)」(谷口雅博・小野諒巳)
- ・第二回(令和五年七月二十六日)「古事記注釈」検討・古事記注釈(四十)「葦原中国平定(五)」(谷口雅博・小野諒巳)

・第三回(令和五年九月二十日)「十八世紀における神代紀解釈―吉見幸和『神代直説』と垂加神道―」(城所喬男)

○古事記研究データベース
「古事記学」から継承する古事記研究データベースを補填・更新した。本年度は平成二十九年度から更新してきた神名データベースが完成し、全三三八件の神名を公開した。また地名データベースの作成・更新も進めており、令和六年一月現在で、総数八三件の地名を公開した。

○『万葉集正義』のマネジメント
創立一四〇周年記念事業で実施する万葉集全注釈である『万葉集正義』の出版事業をマネジメントした。

○『万葉新採百首解』の翻刻・公開
昨年度に翻刻を行った『万葉新採百首解』の上中巻を公開した。下巻は次年度に公開予定。

○「井上氏旧蔵資料」の整理
本学所蔵「井上氏旧蔵資料」(井上頼圀―頼文―頼寿三代の資料群)を整理し、簡易目録の作成を進めている。令和六年一月現在、約二四〇〇点の目録情報を入力した。

○古事記系図ビューアー
昨年度にPDF公開をしていた「古事記系図」を改修し、「古事記系図ビューワー」を公開した。本ビューワーは「古事記」上巻から下巻までに記載される神と天皇の系図を一枚にまとめ、ウェブ上で閲覧・操作できるようにしている。

本ビューワーでは、利用者の利便性を考慮して検索や上中下巻の部分

表示ができるほか、神名・人名を選択すると、①神名・人名、②読み、③ローマ字、④別名、⑤別名読み、⑥別名ローマ字、⑦性別、⑧古事記の登場箇所、⑨データ(関連する各データベースの項目へのリンク)、⑩注の情報が表示されるようにした。



〈古事記系図ビューワー〉

○研究成果

『古事記』注釈及び同注釈の英訳は、『國學院大學研究開発推進機構紀要』十六号(令和六年三月)に掲載する。各種データベースの成果は「古典文化学」事業ホームページで公開している。

(文責・渡邊 卓)

『延喜式』祭祀関連条文集成

はじめに

学術資料センター(神道資料館部門)では、現在『延喜式』祭祀関連条文集成(以下、「本データベース」)の作成・編集、及びウェブ公開に向けた作業を行っている。

本データベースは、十世紀成立の古代法典『延喜式』全五十巻の計三千を超える条文の中から、古代国家で行われた恒例・臨時の祭祀に関する条文を抽出し、その条文概要をデータとして集めたものである。

作業はコロナ禍の令和二年(二〇二〇)度に開始し、確認作業

を続け、令和四年度末には内部検討用の資料となる冊子を作成した。条文の読解・抽出と概要文の作成は木村が中心に行い、データ整理全般には高橋あかね(本機構 研究補助員)、その補助に松本菜摘美(元臨時雇用員)と青木里紗(臨時雇用員)、概要文の確認作業に高夢雨(臨時雇用員)があたった。今年度末までに「國學院大學デジタルミュージアム」上で公開し、その後も増補・編集作業を続け、また他のデータベースとの横断連携を行うことでデータの充実化を図っていく予定である。これは中期五カ年計画の戦略3における、DX等を活用した研究成果・学術資産の活用・発信に関連している。

データベースの概要

『延喜式』は古代の国家運営に関する膨大な情報量を有する、古代史研究に不可欠の資料である。それは祭祀の理解においても同様で、「神祇式」と総称される巻1〜10は特に重宝されてきた。しかし、祭祀について規定した条文は、巻11「太政官式」〜巻50「雜式」の計四十巻にも数多く散在し、本データベースではこれらを含めた全ての条文の中から、祭祀ごとに関連するものを抽出している。

関連条文を集成した恒例祭祀は、神祇令既定の十三種の令制祭祀に加え、巻1・2「四時祭祀」上下に規定の祭祀や行事、そして巻15「内蔵式」規定の公祭^{おむけまつり}といった、毎年及び毎月恒例の諸祭祀である。また、臨時の祭祀としては、代表的な大嘗祭・八十島祭^{やそしままつり}・出雲国造神寿詞^{かんよこと}奏上儀・神宮式年遷宮を挙げた。

祭祀ごとに抽出した条文は、その祭祀を中心的に規定したもののや、文中に祭祀名が記載されているような直接的に関連する条文だけでなく、祭祀の性格を比較・検討する上で有益と認められるような間接的に関連する条文も採り上げた。

なお、概要文は、その条文の大きな内容や性格を解説したものである

り、詳細な祭祀次第や祭料の品名・数量等を列挙するような逐語訳的なものではない。また、条本文は引用していないが、代わりに虎尾俊哉編『訳注日本史料 延喜式』上中下(平成十二〜二十九年、集英社)における、条文掲載巻・頁及び対応する校補・補注の掲載頁を付した。同書は『延喜式』全巻を網羅した最新の校訂本であり、頭注・補注には通説的理解や研究史なども簡潔にまとめられている。本データベースの概要文でも、同書の解説を参照した部分にはその該当頁を明記した。データベース単体でも研究の足掛かりとして使用できるが、同書と併せて用いることで、より利便性を向上することを企図するものである。

『延喜式』撰上一一〇〇年に向けて

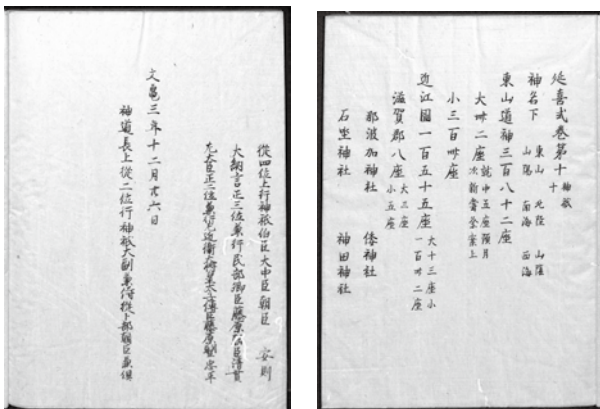
三年後の令和九年(二〇二七)は、『延喜式』が完成した延長五年(九二七)からちょうど一一〇〇年の節目にあたる。今から約百年前には、皇典講究所・全国神職会により、撰上一一〇〇年を記念した展覧会(於、本学。大正十五年(一九二六))が開催され、また『校訂延喜式』(昭和四年(一九二九)〜七年、東京校訂延喜式出版部)が刊行された。

その後も本学は現在まで継続して『延喜式』の研究を蓄積してきており、本部門でも令和九年に向けて関連する研究や展示・企画を行ってみたいと考える。

例えば本部門が調査・整理を行っている西田長男旧蔵資料群には、複

数の『延喜式』写本が含まれている。この中には室町時代後期写の三条西実隆筆の抄出本(『研究開発推進機構紀要』14掲載の拙稿で紹介)や近世前期写の九条家冊子本(写真参照)など、存在自体は学界に知られていても長く所在が明確ではなかったものもある。このような資料を本部門が学内外の研究者のハブとなつて研究を進め、また広く社会に展示・公開していくことは、大きな意義を持つと考える。

本データベースは、このような今後の本部門における『延喜式』研究の一環に位置づけるものである。(文責・木村大樹)



『延喜式』九条家冊子本(右:巻10第一丁表、左:同奥書)、國學院大學博物館蔵、西田長男旧蔵

Kokugakuin Japan Studies (KJS)

日本文化研究所は、研究面における国際交流を推進することを念頭に置いて、*Kokugakuin Japan Studies* とする英文オンラインジャーナルを二〇一九年度に創刊した。刊行時期にこれまで報告することができなかったため、本号で報告する。同誌は、本学の「日本」に関わる学術成果を国際的に広く発信することを目的としたもので、編集委員会が毎号テーマを設定し、テーマに即した論文三本程度を、英訳して掲載している。

創刊号は“Interrogating the Boundaries of Japanese Culture” (日本文化の境界を問う) をテーマとして、次の三本の論考を掲載した。

- ・ TANIUCHI Masahiro “The *Kojiki*’s Worldview: Entangled Worlds of Gods and Humans” (谷口雅博「『古事記』の世界認識—交錯する神の世界と人の世界—」『東アジア文化研究』二二号、二〇一七年二月、一〇一―一五頁の英訳)
- ・ HANABE Hideo “On the Folktale *An Ox in the Bride’s Carriage*: Classical Tellings and Worldwide Comparisons” (花部英雄「昔話「嫁の輿に牛」の研究—古典および世

界との比較—」『國學院雑誌』二二〇巻三号、二〇一九年三月、一九―三三頁の英訳)

- ・ ISHIKAWA Norio “The Origins of Shima Toshio’s “Japanesia” Ideas” (石川則夫「島尾敏雄の「ヤポネシア」論—その起源—」『國學院雑誌』二一八巻一号、二〇一七年一月、六七―八四頁の英訳)

二〇二〇年度刊行の第二号では、皇位継承を念頭に置いて“*The Emperor and the Japanese Culture*” (天皇と日本文化) をテーマに掲げ、次の三本の論考を掲載した。

- ・ TOSA Hidesato “Portrait of the Solitary Empress: Genmei Tenno in *Man’yōshū*” (土佐秀里「孤独な女帝の肖像—万葉集が語る元明天皇—」『國學院大學紀要』五六巻、二〇一八年二月、一〇三―一二九頁の英訳)
- ・ OISHI Yasuo “The Composition of the “Plum-blossom Poems” in *Man’yōshū*” (大石泰夫「梅の花の歌の成立」『國學院雑誌』二二〇巻一〇号、二〇一九年十月、一―三三頁の英訳)
- ・ MOTEGI Sadasumi “Japan’s Imperial Household Rites: Meaning, Significance, and

Current Situation” (茂木貞純「皇室祭祀の意義と現状」『國學院雑誌』二二〇巻一〇号、二〇一九年十一月、二七四―二九三頁の英訳)

二〇二一年度刊行の第三号では“*Transmitting Japanese Cultures*” (日本文化を伝える) をテーマとして、特に日本の芸能・祭祀の伝承に関わる、次の三本の論考を掲載した。

- ・ OGAWA Naoyuki “Public Stage Performances of Folk Performing Arts (*Minzoku Geinō*) in Japan: History, Meaning and Significance” (小川直之「民俗芸能の舞台公演—その歴史・意義—」『都市民俗研究』二四号、二〇一九年二月、一―三三頁の英訳)
- ・ YAMAMOTO Kenta “The Structure of Iwami Kagura’s Existence in Western Shimane Prefecture” (山本健太「島根県西部地域における石見神楽の存立構造」『國學院大學紀要』五九巻、二〇二一年二月、一九―四九頁の英訳)
- ・ KUROSAKI Hiroyuki “The Inclusiveness of Festival Culture in the Post-Disaster Rural Community Restructuring Process” (黒崎浩行「災害後の集落再編過程に見られる祭礼文化の包摂性」『國學院大學紀要』五九巻、二〇二一年二月、一五―二八頁の英訳)

二〇二二年度刊行の第四号では“*Japanese Culture: Formation, Transformation, and Passing On*” (日本文化の形成・変容・継承) をテーマとして、文化が変容しながら

継承されていく側面について論じた。次の三本の論考を掲載した。

- ・ SUZUKI Satoko “The Background to the Formation of Shinto Shrines’ Annual Events: Seasonal Celebration Rites” (鈴木聡子「神社年中行事の形成背景—節日神事を中心に—」『國學院雑誌』二二二巻一〇号、二〇二二年十月、一―一五頁の英訳)
- ・ ITÔ Ryōhei “The Sites of Tales’ Births and Deaths: “Disorienting Deity” -type Bewitching Fox Stories” (伊藤龍平「物語が生まれる場、死ぬ場—「迷ハシ神型」妖狐譚を例として—」『日本文学論究』八一冊、二〇二二年三月、五―一四頁の英訳)
- ・ HATTORI Hiromi “Umbrella Floats Connecting the Dead and Living: The First Bon Events of the Nakiri Hamlet in Mie” (服部比呂美「死者と生者を結ぶ傘鉾—三重県志摩市大王町波切の新盆行事から—」『國學院雑誌』二一八巻四号、二〇一七年四月、一五三―一七〇頁の英訳)

二〇二三年度末に、第五号を刊行する予定である。

なお、公開については、日本文化研究所ウェブサイト <https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/jicc/jicc-publications> や、学術情報リポジトリ <https://k-rain.repo.nii.ac.jp/> に掲載しております。

(文責・星野靖一)

特別展

「三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々―」

■展示趣旨

特別展のねらいと伊豆諸島・半島伊豆半島・諸島は、環太平洋造山帯の一角を成す火山帯に由来する、厳しくも豊かな自然環境・景観に恵まれる。そうした環境・景観の形成には、三つの大きなプレートトの動きが関係している。プレートトという大地の営みが生み出した伊豆半島は、地質学的な特異性とその美しい自然から、二〇一八年にユネスコ世界ジオパークの認定を受けた。

そうした伊豆地域において、古代の人々は自然の現象である噴火と造島に神々のはたらきを見出し、神の存在を認識して祭祀を行ってきた。神々の神業は古代国家によって重視され、国史をはじめとした文献記録や考古遺物には、祭りが捧げられた痕跡を見出せる。三嶋の神とその眷属神に対する信仰の起りである。さらに、中世以降は神仏関係が高ま



ポスター・チラシ画像

る中で、古代の神の事蹟は仏教的な世界観や語句に根差して再編され、いわゆる「三嶋大明神縁起」として流布された。こうして誕生した神の新たな物語は、島々の創成説話と伝えられて今日に至っている。一方、三嶋神は源頼朝以来、武士の守護神としても崇敬され、各地へと信仰は広まりをみせていった。

こうした伊豆三嶋信仰について、本学では大場磐雄博士以来の神道学・考古学を中心とした研究蓄積と実績を有するが、この度の特別展は、神のはたらきの理解・説明に、地球科学・地質学という自然科学的な知見を加えるという文理融合を一つの姿勢として、改めて捉え直し、展示・公開を企図したものであった。

右に基づき、本展示は伊豆半島ユネスコ世界ジオパーク認定5周年を記念し、同パークを推進・運営している一般社団法人 美しい伊豆創造センター(以降、センターと表記)と國學院大學博物館との間で協定を結び、相互協力の下に開催した。本学博物館での特別展のほか、伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」においても、サテライト展示「三嶋の神のモノガタリ―伊豆半島と三嶋信仰の歩み―」(会期：令和五年

九月二十三日(土)〜同十一月二十八日(火)を開催し、大学のみならず現地で催事を行うなど、密接な協力の上で実施した。

なお、世界ジオパークは世界遺産などと同様に、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)が推し進めているプログラムをいう。地質学的にみて国際的な価値のあるサイト(場所)を、「保護」「教育」「持続可能な開発」が一体となった概念により管理するエリアを「ジオパーク」とする。価値ある地質遺産を保護しながら、環境教育、ジオツーリズムといった分野に活用することで、地域の持続可能な開発を促すものである。

■開催概要

会期：令和五年九月二十三日(土)〜同十一月十九日(日)

主催：國學院大學博物館

共催：一般社団法人 美しい伊豆創造センター

後援：神社本庁

催事：本特別展に関連して、トークイベントやウォーキングイベントなど、各種の催事を開催した。主催は(國) 國學院大學博物館(美) 〓センターの形で表記する。

●八月二十六日(土)、トーク・ジオカフェ@三島「三嶋の神のモノガタリ―伊豆の動く大地とそこに生まれた信仰―」於三島市民文化会館(美)

●令和五年九月二十三日(土)、オ

プニングセレモニー、於國學院大學博物館(國) 同センターの代表理事・豊岡武士会長(三島市長)を始めとする、関係者出席の下、記念撮影や動画公開などが催された。



会長と当館館長の記念撮影

●同十月九日(月)、トークセッション「伊豆の神々と火山を語る」於國學院大學渋谷キャンパス学術メ

ディアセンター一階(國) ※「三嶋の神のモノガタリ」ミュージアムトークとホームカミングデーの関連イベントを兼ねる

●同十月二十一日(土)、ウォーキング@白浜、於静岡県下田市(美)

●同十一月四日(土)、ウォーキング@三島、於静岡県三島市(美)

展示：展示テーマの舞台となった静岡県三島市、同下田市や東京都三宅島についてのビジュアル的な理解の促進ならびに、プレートトの活動による伊豆半島の成り立ちを示すため、博

物館メディアアウォールにて、開催期間中は同センターより提供された動画二本を放映していた。

■関連動画

展示された伊豆三嶋信仰および「三嶋大明神縁起」への理解を深めるコンテンツとして、二本の展示解説動画を作成し、当館のOnline Museum (YouTube) 上で公開した。題名と解説者は次の通りである。



「三嶋大明神縁起」をカタるサムネイル画像

①特別展「三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々―」
公開…十月十四日(土) 正午～
解説者…吉永博彰(國學院大學博物館・助教)

②「三嶋大明神縁起」をカタる
公開…十一月一日(水) 正午～
解説者…三嶋 健(國學院大學博物館・客員教授)

■刊行物
特別展図録(A4判・八八頁・

オールカラー)一冊を刊行した。



図録の表紙画像

■展示構成
全五章から成る本展の展示構成は次の通りである。

序章 伊豆諸島・伊豆半島の成り立ちとジオパーク

伊豆諸島・同半島は、火山活動帯に由来する温泉や海浜、海食洞ほか豊かな自然環境に恵まれ、近年は地質遺産を保護・活用して持続可能な開発を目指すジオパークにも認定されている。ここでは先ず、展示資料として美しい伊豆創造センターより借用した土層の剥ぎ取り標本や岩石標本を陳列し、また伊豆地域における噴火・地震災害の年表をパネルで示すなど、地球科学・地質学という自然科学的な知見に基づく伊豆半島・諸島の成り立ちと、ジオパークの活動を紹介した。

第I章 神の顕現とモノガタリの始まり

三嶋神とその眷属神の顕現ならびに島の焼出については、古代社会の中でどのように受け止められていたのか。第I章では導入として、『日本書紀』『日本後紀』『後日本後紀』

という六国史ほか古代の歴史書(の近世の版本・写本)や、大島の泉浜遺跡C地点出土遺物といった祭祀遺物の展示を通じて、古代の三嶋神やその後神・御子神といった眷属神に捧げられた祭祀や信仰の様態を示している。

第II章 火の島をめぐるモノガタリ

古代国家の祭祀制度が変容し、平安中期頃までには国司によって伊豆三嶋神を祀る場も府中へと移されたが、最初に三嶋神を祀る中心地であったとされる三宅島では、三嶋信仰はどのように展開したのであろうか。ここでは、三嶋の神のモノガタリともいえるべき、古代の三嶋神による島の焼出の靈験に根差して作り出された「三嶋大明神縁起」を始め、当地が古代国家より重視されていたことを示す「奈良三彩」(断片)等の関連資料により、島嶼部にみだ信仰の様相や祭祀の実態を示す。

第III章 伊豆半島でモノガタられる三嶋大明神

島嶼部で祀られていた三嶋神は、まず島嶼を一同に望む伊豆半島南部の白浜の地、后神を祀る伊古奈比咩命神社に程近い地域に遷し祀られたとされる。やがて平安後期に至り、社会構造の変化と噴火活動の小康期も相まって、三嶋神は造島という自然現象に係る神から国鎮守へと位置付けに変化をみせるが、半島南部でも古代以来の三嶋神の神威が、仏教との関わりの中で中世神話として縁

起の形に改められ、流布されるようになる。「三宅記」の名で知られる同社所蔵の縁起ほか、境内出土遺物などを展示し、半島部における信仰の展開を紹介した。

第IV章 三嶋明神と武家政権

国府で奉斎されるに至った三嶋明神は、源頼朝による平氏政権の打倒に効験をみせる。以来、武門の守護神として各地に勧請・奉斎され、三嶋信仰が広がる端緒となった。また、鎌倉期以降は東海道の道筋の変更に伴い境内が街道に直接面するようになり、社頭は名所として興隆する。本章では『吾妻鏡』や「三嶋大社矢田部家文書」(国指定文化財)などの関係資料を基に、当社・中世三嶋明神と歴代の武家政権との関係を紹介し、社頭図や浮世絵等から社頭の様相を示した。

終章 國學院大學と伊豆三嶋研究の系譜

考古学・神道学問わず、伊豆半島・同諸島の神社や神祇信仰を対象にした研究と國學院大學との関わりは古く、大場磐雄博士を中心とした伊古奈比咩命神社(白濱神社)の社誌編纂(一九四三年刊行)以来、現代に至るまで、多くの蓄積を有する。國學院大學における伊豆三嶋研究の研究成果として、社誌の草稿本や収集した絵葉書、これまでの本学における関連の刊行物等を展示した。

(文責・吉永博彰)

國學院大學博物館 令和五年度の特集展示

■博物館の特集展示

國學院大學博物館の展示には、国学と本学による教育・研究の歩みを示す校史展示、考古資料から日本列島の歴史を紐解く考古展示、そして我が国の信仰文化を伝える神道展示からなる「常設展示」や、大規模な研究公開の場である「特別展示・企画展示」のほか、最新の研究成果などを紹介する「特集展示」がある。

このうち「特集展示」は、本学による研究・教育成果の公開や、連携館との共同事業、学会連携イベント、あるいは所縁の神社における各種事業とタイアップした展示などからなり、広く社会的な関心に応えるもの。年単位での準備を要する「特別展・企画展」と異なり、小規模ながら時宜に合った速報的展示が可能となるのも、「特集展示」の優れた特徴と言える。以下では、令和五年度(二〇二三年度)に開催した特集展示について、概ね時系列順に紹介しておきたい。

■神道文化関係

所縁の神社に関わるものとしては、四月から賀茂別雷神神社賀茂競馬九三〇年記念事業「横山華山筆「賀茂競馬図屏風」記念公開」、九月から同「上賀茂神社競馬図屏風」記念公開」を実施した。これは、寛治

七年(一〇九三年)に始められた賀茂競馬関係の周年展示であり、各地の博物館・美術館における「コラボ展示」として開催したものである。

また、孔子の言行を伝える『論語』が、どのように普及していったか紹介する企画展「論語 for Beginners——『論語』と格闘した江戸時代——」の開催に合わせ、儒教と神道との関係性について理解を深めるための同時開催企画として、七月から「垂加神道の展開——儒学・神道と格闘した人々——」を実施した。

■文学・民俗学関係

文学関係としては、中古文学会との共催にて、五月の同会春季大会に合わせて國學院大學図書館所蔵の歌書を紹介する「平安朝和歌への誘い」を企画した。

九月からは、関東大震災一〇〇年・折口信夫没後七十年を機に、折口の詩「砂けぶり」を軸として朝鮮人虐殺問題に焦点を当てた「蠟燭と流言の夜——折口信夫が見た関東大震災——」を開催。ここでは、折口の弟子であった考古学者、大場磐雄が残した震災当時の写真も活用している。

■刀剣学関係

今年度は、刀剣関係の特殊展示も相次いだ。足利市による名刀山姥切

國廣の購入が決したタイミングで、十月より「近代刀剣学序説——山姥切國廣」発見の頃——」を開催。これは、本学が近代的な刀剣研究の黎明期に中心をなしたことに因むもの。

山姥切國廣も、杉原祥造が大正年間本学における講義で取り上げたことから世に知られることとなった。

続いて十一月から実施した「桑名宗社伝来——双子の宝刀『村正』——」は、太平洋戦争中に、刀身保護のため漆塗りにされた村正の奉納太刀を修復するための「出開帳」として行ったもの。修復に向けた桑名宗社のクラウドファンディングも目標を大きく超える応募があったという。

■相互貸借事業

暫く休止していた西南学院大学博物館との相互貸借事業も十一月から再開となり、本学にて「創られたキリシタン像——資料からみるキリシタンへのまなざし——」を開催した。これは、西南学院大学博物館が実施した特別展のダイジェスト版である。なお、西南学院大学博物館では、先述した当方企画の「近代刀剣学序説——山姥切國廣」発見の頃——」を展観した。

■大学院・学部

今年度は、博物館の前身の一つである考古学標本室の創立から九十五年、そして現在の館名に改めてから十年に当たることを記念して、十一月より「見はるかす九十五年——発展する研究拠点——」を開催した。これは、大学院における「博物館学専門

実習」の成果でもあり、大学院生が授業の一環として企画・展示に参画するなど、実践的な学芸職教育の効果を上げている。

■その他

なお、令和六年二月には、西南学院大学博物館による相互貸借展示の展示替えと、ウポポイ渋谷公演「イノミ」に合わせての小規模展示を計画している。

(文責・深澤太郎)



令和五年度 國學院大學博物館活動報告

一、活動報告

令和五年度は、博物館の展示・公開として、特別展一回、企画展五回、特集展示を七回開催した(他、記念展示や季節の展示も実施)。館内における新型コロナウイルス感染症対策を部分的に実施しつつ、通常開館での運営を行った。

その他、博物館の基盤強化のための施策を継続・推進した。特に本年度は、学部や学生との連携や外部での普及活動が顕著であった。

二、展示公開(表1)

【特別展】

・特別展「三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々―」*(図録刊行)、会期：令和五年九月二十三日～十一月十九日。主催：当館、共催：(一般社団法人)美しい伊豆創造センター、後援：神社本庁。

【企画展・特集展示】

・春の特別列品「土御門家がみた宇宙―江戸時代の天文観測―」(図録刊行)、会期：令和五年四月一日～五月十四日。主催：当館、本学図書館。

・企画展「祓―儀礼と思想―」(図録刊行)、会期：令和五年五月二十日～七月九日。主催：当館。

・企画展「論語 for Beginners―『論語』と格闘した江戸時代―」(図録刊行)、会期：令和五年七月十五日～

九月十八日。主催：当館(協力：本学文学部中国文学科)。

・企画展「マラッカを越えて極東アジアへ―ポルトガル地図学の十六世紀―」(図録刊行)、会期：令和五年十一月二十五日～令和六年二月十二日。主催：当館(協力：本学文学部地理学研究室)。

・企画展「榎園好古図譜―北武蔵の名家・根岸家の古物(たから)―」(図録刊行)、会期：令和六年二月十七日～四月十四日を予定。主催：当館。

このほか、神道展示室にて、賀茂

別雷神社(京都府)賀茂競馬九百三十年記念事業と連携した展示を二回実施した。また特集展示を行うなど、本学博物館学の実習展示を行うなど、全体を通して学部や大学院との連携が図られた。特集展示は表1を参照。(*は指定文化財の借用を伴う)

三、教育普及

教育普及事業では、コロナ禍以降初となる対面でのトークイベントを実施。加えてYouTubeで展示解説の動画を公開している「オンラインミュージアム」も引き続き、全展示で実施した(詳細は表1)。

また本年度は、東急プラザ渋谷にて、ミニミュージアム「日本の夏に出会う」展を開催。七月七日～九日の三日間に亘って、出張展示(シヨツプ倉)と計六種のイベントを実施。

この他、本学放送研究会の学生と

表1 令和五年度 展示内容と関連事業

展示(会期)		関連事業	
特別展	三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々― (R5.9/23~11/19)	オンラインミュージアム	10/14 吉永博彰(本学助教)「特別展「三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々―」を展示解説!」、11/1 三橋健(本学客員教授)「三嶋大明神縁起」をカタル
		対面	【トークセッション】10/9「伊豆の神々と火山を語る」※HCD連携イベント 笹生衛(当館館長)・内川隆志(当館副館長)・深澤太郎(本学教授)・吉永博彰(本学助教)
企画展	春の特別列品 土御門家がみた宇宙―江戸時代の天文観測― (R5.4/1~5/14)	オンラインミュージアム	4/22 「春の特別列品「土御門家がみた宇宙―江戸時代の天文観測―」ご紹介☆多」
	祓―儀礼と思想 (R5.5/20~7/9)	オンラインミュージアム	6/17 笹生衛(当館館長)・吉永博彰(本学助教)「企画展「祓―儀礼と思想―」を展示解説!」
	論語 for Beginners―『論語』と格闘した江戸時代― (R5.7/15~9/18)	オンラインミュージアム	8/5 石本道明(本学教授)・青木洋司(本学准教授)・西岡和彦(本学教授)「企画展「論語 for Beginners―『論語』と格闘した江戸時代―」を展示解説!」
	マラッカを越えて極東アジアへ―ポルトガル地図学の16世紀― (R5.11/25~R6.2/12)	オンラインミュージアム	12/23 吉田敏弘(本学教授)・関良子(本学特別研究生)「【簡易版】企画展「マラッカを越えて極東アジアへ―ポルトガル地図学の16世紀―」解説」
企画展	榎園好古図譜―北武蔵の名家・根岸家の古物(たから)― (R6.2/17~4/14)	オンラインミュージアム(予定)	3/9 内川隆志(当館副幹事長)「北武蔵の名家・根岸家のたから」
		対面(予定)	【ミュージアムトーク】2/24 内川隆志(当館副館長)、3/9 三浦泰之(北海道博物館研究部学芸学主幹)
特集展示	平安朝和歌への誘い(共催：中古文学会)【ホール】(R5.5/20~6/18)		
	垂加神道の展開―儒学・神道と格闘した人々―【神道展示室】(R5.7/15~9/18)		
	折口信夫が見た関東大震災【校史展示室】(R5.9/23~11/19)		
	近代刀剣学序説―「山姥切國廣」発見の頃―【考古展示室】(R5.10/5~11/9)		
	西南学院大学博物館 相互貸借展示：創られたキリシタン像―資料からみるキリシタンへのまなざし―【考古展示室】(R5.11/10~R6.2/18)		
	博物館学専門実習展示：見はるかす95年―発展する研究拠点―【校史展示室】(R5.11/25~R6.2/12)		
桑名宗社伝来―双子の宝刀「村正」―【神道展示室】(R5.11/25~R6.2/12)			

表2 令和5年度入館者数

月	(名)
4月	5,044
5月	7,265
6月	7,248
7月	5,982
8月	6,318
9月	2,886
10月	5,182
11月	4,395
12月	3,685
1月	2,734
合計	50,739

令和5年1月末日現在

本年度の入館者数は、令和六年一月末日現在、約五万人となり(表2)、コロナ以前の来館数に戻りつつある。(文責：國學院大學博物館)

連携し、館内で音声での解説が聞ける「ポケット学芸員」を開始した。産業文化博物館コンソーシアム(COMIC)の受入れや西南学院大学博物館との相互貸借展示の再開、「国際博物館の日」のイベント実施など、勢力的に活動を行った。

四、環境整備・営繕

展示・保管空間の空気質・温湿度を良好な水準に維持するための施策やIPMを実施し、資料保護・管理運営の質的向上に取り組んだ。また、図書館事務課の協力を得て、博物館外のAMC資料収蔵エリアにおいても、害虫対策の予備調査に着手した。新型コロナウイルス対応は、5類移行後の関連ガイドラインに即して各種対策を再考・実施した。

五、運営支援

ウェブサイトやSNS等活用した積極的な情報発信を行っている。コロナ禍で減少したミュージアムシヨツプの店頭販売も回復し、本年度よりキャッシュレス決済を導入した。

彙報

会議

○全体

- ・令和五年度臨時運営委員会、令和五年七月七日(金)、メール審議
- ・令和五年度第二回運営委員会、令和五年九月二十日(水)、若木タワ1地下一階会議室○二
- ・令和五年度第三回運営委員会、令和五年十一月二十二日(水)、若木タワ1地下一階会議室○二
- ・令和五年度第四回運営委員会、令和六年一月十一日(木)、若木タワ1地下一階会議室○二
- ・令和五年度第二回企画委員会、令和五年七月五日(水)、メール審議
- ・令和五年度第三回企画委員会、令和五年九月十五日(金)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和五年度第四回企画委員会、令和五年十一月八日(水)、メール審議
- ・令和五年度第五回企画委員会、令和六年一月十日(水)、メール審議
- ・令和五年度第一回人事委員会、令和五年四月十九日(水)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和五年度第二回人事委員会、令和五年七月三日(月)、メール審

議

- ・令和五年度第三回人事委員会、令和五年九月十五日(金)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和五年度第四回人事委員会、令和五年十一月十七日(金)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和五年度第五回人事委員会、令和六年一月三十一日(水)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和五年度第一回教員等資格審査委員会、令和五年九月十五日(金)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和五年度第二回教員等資格審査委員会、令和五年十一月十七日(金)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和五年度第三回教員等資格審査委員会、令和六年一月三十一日(水)、AMC棟五階会議室○六

○日本文化研究所

- ・令和五年度第二回所員会議、令和五年六月二十八日(水)、オンライン会議
- ・令和五年度第三回所員会議、令和五年九月一日(金)、オンライン会議

- ・令和五年度第四回所員会議、令和五年十月二十五日(水)、オンライン会議
- ・令和五年度第五回所員会議、令和五年十二月二十日(水)、オンライン会議

○学術資料センター

- ・令和五年度第一回学術資料センター会議、令和五年八月三十日(水)、オンライン会議

- ・令和五年度第二回学術資料センター会議、令和五年十二月二十日(水)、AMC棟五階プロジェクトルーム二
- ・令和五年度第三回学術資料センター会議、令和六年一月二十三日(火)、メール審議

○校史・学術資産研究センター

- ・令和五年度第二回校史・学術資産研究センター会議、令和五年九月一日(金)、オンライン会議
- ・令和五年度第三回校史・学術資産研究センター会議、令和五年十二月十三日(水)、オンライン会議

○研究開発推進センター

- ・令和五年度第二回研究開発推進センター会議、令和五年九月一日(金)、オンライン会議
- ・令和五年度第三回研究開発推進センター会議、令和五年十二月十九日(火)、メール審議

○國學院大學博物館

- ・令和五年度第二回國學院大學博物館会議、令和五年九月一日(金)、メール審議
- ・令和五年度第三回國學院大學博物館会議、令和五年十二月二十日(水)、AMC棟地下一階博物館ワークショップスペース

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○全体

- ・第四十八回日本文化を知る講座「渋谷と國學院大學―校地移転100年を迎えて―」、令和五年七月十五日(土) 十三時三十分～十七時十分、AMC棟一階常磐松ホール、講師「渡邊卓(國學院大學研究開発推進機構准教授)」「渋谷の岡に大学たてり」の100年」、吉田律人(横浜都市発展記念館主任調査研究員)「関東大震災と渋谷」、手塚雄太(國學院大學文学部准教授)「渋谷区の誕生」、高久舞(帝京大学文学部講師)「渋谷をそだてる若者文化」
- ・令和五年度國學院大學研究開発推進機構公開学術講演会「國學院大學における博物館黎明期―戦後もなくの考古学資料室―」、令和五年十一月十八日(土) 十三時～十四時三十分、AMC棟一階常磐松ホール、講師「下津谷達男(元國學院大學栃木短期大學教授)」

○日本文化研究所

- ・国際研究フォーラム「見られることと何が変わるのか―ツーリズムと宗教文化―」、令和五年十二月十七日(日) 十三時三十分～十七時三十分、百二十周年記念二号館一階二一〇一教室、報告者「ケイレブ・カーター(九州大学大学院准教授)」「自分を取り戻す/山里を取り戻す―修験道とツーリズム

の交錯―、石本東生(國學院大學観光まちづくり学部教授)「『ギリシャ』・神話とキリスト教の舞台として観光―文化遺産を活かす共存―」、加藤久子(大和大学教授)「共生の物語をつむぎなおす―ポーランドに出現した2・5次元のユダヤ人街―」、沈昭良(写真家・華梵大學教授)「写真と社会風景―『STAGE』『Singers & Sages』『台湾綜芸団』を例こ―」、コメント―山中弘(筑波大学名誉教授)

○研究開発推進センター

・令和五年度「古典文化学」国際研究フォーラム、令和五年十二月一日(金)十三時―十六時、総合学修館(六号館)六B一三教室、報告―笹生衛(國學院大學神道文化学部教授)「東アジアの交流・交易と日本の神観の変遷―認知宗教学の視点で考えた宗像三女神の神観を中心に―」、西岡和彦(國學院大學神道文化学部教授)「神儒兼学と和魂漢才」、王凱(南開大學外国語学院副院長)「科研からみる中国の日本研究」

出張

○日本文化研究所

・川嶋麗華・大場あや、「三宅島での靈魂観・死生観に関する現地調査」のため、令和五年八月十五日(火)―八月十七日(木)、東京都三宅村

○学術資料センター

・深澤太郎・吉永博彰・高橋あかね、「静岡県三島市における三嶋信仰関連資料の調査」のため、令和五年五月十七日(水)、静岡県三島市

・深澤太郎・橋本裕之・佐々木聖佳、「三宅島における三嶋信仰に関する総合調査」のため、令和五年六月十八日(日)―六月二十日(火)、東京都三宅村

・深澤太郎、「三宅村御祭神社所蔵楽面の一時返却および東京都文化財ウイークに伴う特別解説」のため、令和五年十一月二日(木)―十一月四日(土)、東京都三宅村

○校史・学術資産研究センター

・渡邊卓、「全国大学史資料協議会2023年度総会ならびに全国研究会参加」のため、令和五年十月三日(火)―十月五日(木)、京都府京都市

○國學院大學博物館

・深澤太郎・吉永博彰、「静岡県下田市・伊古奈比咩命神社における資料画像の調査・撮影」のため、令和五年六月十四日(水)、静岡県下田市

・吉永博彰、「特別展「三嶋の神のモノガタリ」に係る三宅島における資料調査・撮影および借用協議」のため、令和五年六月十八日(日)―六月二十日(火)、東京都三宅村

・深澤太郎、「三宅島における三嶋

信仰に関する動画撮影」のため、令和五年七月十七日(月)―七月二十日(木)、東京都三宅村

・深澤太郎・吉永博彰、「静岡県三島市における展示関連催事への出席・協力」のため、令和五年八月二十六日(土)、静岡県三島市

・笹生衛・深澤太郎・吉永博彰、「特別展「三嶋の神のモノガタリ」に係る三宅島での資料借用および関連コンテンツ調査・記録」のため、令和五年八月三十一日(木)―九月二日(土)、東京都三宅村

・吉永博彰、「特別展「三嶋の神のモノガタリ」に係る三嶋大社所蔵資料の借用」のため、令和五年九月十九日(火)、静岡県三島市

・深澤太郎・吉永博彰、「國學院大學博物館の連携機関による催事の開催協力」のため、令和五年十月二十一日(土)、静岡県下田市

・吉永博彰、「國學院大學博物館の連携機関による催事の開催協力」のため、令和五年十一月四日(土)、静岡県三島市

・吉永博彰、「特別展「三嶋の神のモノガタリ」に係る三宅島郷土資料館資料の返却」のため、令和五年十二月十八日(月)―十二月十九日(火)、東京都三宅村

・深澤太郎・吉永博彰、「特別展「三嶋の神のモノガタリ」に係る伊豆

地域への資料返却」のため、令和五年十二月二十一日(木)―十二月二十二日(金)、静岡県下田市

・内川隆志、「企画展「榎園好古図譜」に係る弘前大学所蔵資料の借用」のため、令和六年一月二十五日(木)―一月二十六日(金)、青森県弘前市

刊行物

○全体

・研究開発推進機構『機構ニュース』通号三十三(令和五年六月二十五日発行)

○日本文化研究所

・日本文化研究所『日本文化研究所年報』十六号(令和五年九月三十日発行)

資料紹介
鈴鹿家伝来装束



本資料は、京都・鈴鹿家に伝来し
たとされる、装束関係資料である。
近世後期を中心に一部近代を含む。
近世の鈴鹿家は、京都・吉田社
（現、吉田神社・京都市左京区）の
社家で、七軒あったとされる。鈴鹿
家が勤仕した江戸時代の吉田家は、
同社の神主職を世襲し、かつ堂上貴
族（清涼殿の殿上間に昇殿を許され
た上級貴族の称）であり、さらに朝
廷の神祇官（神祇行政を掌った朝廷
の役所）・権大副（次官職の称）職

を世襲した神祇官人でもあった。
吉田家の下で、鈴鹿家は吉田社の
社家として、それぞれ禰宜や祝・権
祝といった役職を継承し、神明奉
仕・神社運営に努めた。その内の上
位四軒は特に重きを置かれ、書状の
中には四家当主の連署により発給し
たものもみられる。すなわち、吉田
家の家老的な役割を果たして吉田家
当主を補佐し、吉田家の家政や社務
を担っていた。さらに、神祇官の三
等官（大祐・少祐）や時に次官（権

少副）といった役職に任じられ、
卜部役を始めて大嘗祭の関連神事・
諸行事に奉仕することもあった。
以上のように、近世鈴鹿家は、江
戸時代の吉田社の社務と吉田家の家
政をはじめとする、各方面において
吉田家を支えた、重要な職務を担う
家柄であったのである。

本資料は、そうした鈴鹿家の一軒
に由来するものであるが、特に帖紙
の表記から、「東鈴鹿家」を称した
家に伝来した装束類と知れる。さら
に、別の帖紙の表書きには、「芳春」
の名が筆書されたものも見受けられ
る。芳春は但馬守を称した近世後期
の鈴鹿家当主の一人であり、同家は
吉田社権祝・中臣流常磐有繼の後裔
であるという（『日本家系・系図大
辞典』奥富敬之、東京堂出版、
二〇〇八年）。

装束類の内容・構成については、
概ね次のように分類・整理できる。
① 衣服15点
袍「表着」、裾「長い裾」、狩衣、
指貫、浄衣、切袴、単衣、私小
忌、袴ほか
② 冠1点
③ 風折烏帽子5点（一部掛緒・箱付）
④ 笏18点
⑤ 木綿手纏（八組紐・紙袋入）
⑥ 火事装束（羽織・胸当・袴・手甲）
⑦ 神事唐櫃（元禄4（一六九一）
年製作）
⑧ 装束の帖紙（包み紙）
※表着と袴の組み合わせを判別し兼
ねるため、種別によって示した。

これらは概ね鈴鹿家が勤務・奉仕
にあたり着用したものと考えられ
る。正装である冠や袍・指貫（裾口
をすぼめた袴）、裾（長い裾）は基
より、狩衣装束や木綿手纏（神事の
奉仕に際して掛ける組紐のたすき）
ほか、平常の勤務服と考えられる袴
（上下同種の布地製）、丸に抱き葉
沢潟の紋があらわれた火事装束の
胸当・羽織など、近世鈴鹿家が用い
た装束の様相が、具体的にうかがえ
る。

（文責・吉永博彰）